戦国大名領国の地域史的研究

稲葉継陽・吉村豊雄
青木勝士・鶴嶋俊彦

1．研究の目的

伝統的日本社会（近世社会）の特質は、村や町などの自律的団体が国や郡を枠組みとする行政機構によってゆるやかに統治されている点に見出せる。そうした構造が形成される起点は、16世紀における戦国大名領国に求められる。したがって、諸地域の戦国大名研究は、それら地域における近世的な社会の成立史論として展開されねばならないだろう。

戦国大名領国研究の固有の意義をこのようにとらえるなら、当該領国の村・町、諸領主の動向を軸に、地域社会の復元的研究と政治過程の動態的研究とを総合する方法が求められる。しかし、近年の熊本地域史研究の場において、また全国の学界動向においても、こうした研究が活発になされているとは言いがたい。

本研究は、戦国期に肥後国球磨・芦北・八代三郡に展開した相良領国をフィールドとして、諸文献史料、城郭遺構、考古学的成果、地名史料、石造物史料などを総合的に収集し、上記の研究方法によりながら相良領国地域の歴史的様相を解明しようとるすものである。

2．研究の経過

本研究２年目を終えようとする現在は、メンバーそれぞれの分担によって文献史料の収集と城郭遺構等の調査・記録が完了し、成果が続々と公表される段階にある。

青木は、『相良家文書』『八代日記』をはじめとする中世文献史料について、大名領国の中枢部、他領国と境界を接する境目地域のそれぞれに内容を区分し、系統だてて整理して、領国内外のミニマムな地域独自の政治動向の復元を完了しつつある。具体的には、相良領国の北辺に接し、同盟と敵対を繰り返す勢力の根拠地となった、益城郡の堅志田領地域について、論考執筆を終えた（2004年公表予定）。

鶴嶋は、相良氏の本拠となった人吉城、八代城のほか、芦北郡の佐敷城、水俣城、八代郡北部の高塚城などの諸遺構、さらにこれら地域に多数存在する小規模城郭遺構の新しい縄張り図作成を完了した。現在は調査成果の集成・分析をすすめており、それが完了すれば、相良氏が構築した城郭に共通する構造上の特質が解明され、同時に個々の城郭の地域における存在意義が明確にされて、全国的視野と地域的視野の双方から、戦国期相良領国の歴史的特質を描き出すことが可能になると考えられる。その成果は学位論文にまとめられる予定である。

稲葉は、昨年度の『熊本大学社会文化研究』１号に掲載した「戦国大名領『境目』地域における城と村落」の成果をより現地に即して発展させるために、同地域のフィールド調査を実施した。その成果は2003年度末に公表される（文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）（１）「現地調査の方法に

よる中世村落・民衆像の再検討」報告書)。

また2003年9月の歴史科学協議会大会（於東京）で、前記論考の成果を取り入れた「中・近世移行期の領域秩序と国郡制」という題目の報告を行い、本プロジェクト研究の成果を学界に提供した。報告内容と討論要旨等は『歴史評論』2004年3月号に掲載される予定である。

吉村は、『新熊本市史』収録の文献史料によりながら、17世紀初期の加藤領国の支配構造を分析し、村落支配のあり方や地域行政の枠組みなどについて、初期近世史の側から課題に迫った。その成果は、ひとまず『新熊本市史　通史編』の叙述として公表された。

3．研究の成果と展望

現在までの成果を簡単に述べれば、以下の2点となる。

第一に、文献史料と城郭遺構の調査によって、ひとくちに大名領国といっても、「中枢と境目」、「沿岸地域と内陸山間地域」などで領国支配上の差異があり、それらが政治的にも相互に影響しあっている状況が明らかになってきた。大名領国内の諸地域における支配構造や領主の存在形態のあり方を丹念に追及してゆく必要がある。

第二に、16世紀において、すでに近世の村につながる百姓の共同体が形成され、畿内近国の惣村と大差ない動向を示していたことが確認された点である。文献史料の全面的な再検討が要請される。

今後は、上記の論点をさらに発展させるべく、成果の公表に努めたい。その過程で得られた批判を踏まえ、まずは相良領国内諸地域の歴史的特質を明確にし、それを相良領国地域論として総括することが必要である。その上で、全国諸地域で長期間にわたって蓄積されてきた戦国大名領国研究との比較作業を行う。それによって、従来はさしたる根拠もなく「後進地域」の枠に押し込められてきた中部九州の伝統社会論を組み立てなおすためのステップとしたいと考える。

（文責・稲葉）